

熊本県本渡市方言の実態

(人称代名詞及び助詞の体系)

三十六回卒 金子美加

天草方言の研究としては通時的・共時的研究書は多いが現在の方言使用の実態に迫るもの特に品詞の面から見たものは少ないようである。そこで人称代名詞と助詞の二つの品詞に絞って現在の方言使用の実態について多角的に捕えたいとの考えから調査を行った。

人称代名詞と助詞の二点に調査目的を絞った理由としては、第一に言語を体系的に調査する場合比較的整然とした結果が得られるのではないかと考えたこと、第二に待遇関係による違いが見極めやすいのではないかと考えたからである。

この点は結果的に見ると次のような利点があったと思われる。それは、人称代名詞が比較的時代の変化に流されやすく、いわば時代の流行を取り入れ易い品詞であると言えるのに対して、助詞は保守性が強く長い時代を不変の形で残っていく傾向にあり、方言という認識が使用している人々の間においてなされにくいからである。

以上のような調査目的から研究を進めていった。

年代層区別は五つとした。(一)中学生(二)高校生(三)青年層(一九〇〇～一九三九歳)(四)中年層(四〇～五九歳)(五)老年層(六〇歳以上)そして、この場合調査対象者が言語形成期(注1)を本渡市で過ごしているということが最低条件であった。生まれてから現在まで一度も本渡市から転出したことの無い人が被調査者としては最も適しているわけであるが、その条件を満たす人を各年代層に渡って探し出すことは困難であったので、前述の条件を最低ラインとした。

次に調査の方法であるが、人称代名詞についてはアンケート調査を行いその結果を参考にしながら自然傍受法で調べた。そして、本渡方言において残っている人称代名詞にはどのようなものがあるか、男女差は関係があるのか、又、社会的要因は影響しているのかどうか等を明らかにした。

助詞については面接調査・自然傍受法が中心になるので確実に本渡市で生まれ育って外へ出たことが無い人を選んだ。しかし人数的に限られた数しか出きなかった。又、調

査期間は昭和六二年八月から十一月までの四ヶ月間である。

ここで調査地域の概略に触れておきたいと思う。本渡市は昭和二年四月に市政が施行され、現在、本渡町・佐伊津町・本町・亀場町・杵宇土町・楠浦町・下浦町・志柿町・宮地岳町の九つの町からなっている。昭和六二年八月現在の市の人口は、四二〇八五人（男性一九九六九人・女性二二一一六人）であり天草郡市の文化・経済・政治の中心地として、上島・下島を中心に一二〇余の島々からなる天草全体の交通の要所として重要な役割を果たしている。しかし、現在過疎化が進んでおり、転入が一日平均六・三人であるのに対して、転出は七・三人となっていることも事実である。（注 一九八四年本渡市役所資料）

このような環境に生活している本渡市の人々がどのような言語を使用しているのか、又近年マス・メディアの普及発達によって、言語にかなりの変化が見られ共通語化が進んで来ているのではないか、といった疑問点を明らかにしてゆくことが地域選定の理由である。

アンケート調査の調査対象者は総数一六〇名であり、このうち男性七四名、女性八六名となっている。年齢分布は表1のとうりである。

表 1

年齢幅	男	女
12～15	52	57
16～20	7	6
21～25	1	3
26～30	0	5
31～35	5	1
36～40	2	5
41～45	0	1
46～50	3	1
51～55	2	2
56～60	0	1
61～65	0	1
66～70	1	1
71～80	1	1
81～90	0	1
合 計	74	86

中学生は十二歳から十五歳までの生徒がいたので年齢層の幅を三歳としたが、以降は四歳としている。又、高年齢層についても調査対象者が少数であったので例外としている。これらの人々に対して表2のアンケート用紙を配布して調査を行ったわけであるが、その項目は、一人称28項目、二人称17項目、三人称39項目、不定称6項目となっておりその他、性別・年齢・職業・最終学歴・言語形成期を本渡市で過ごしたか否かを調べる欄を設けた。

アンケートの回答を(一)年代層間の比較、(二)男女間の比較、(三)各人称ごとの比較に分類してそれぞれ④よく使う、⑤知っているがあまり使わないもの、⑥知らないものの割合を統計にとり検討・研究した結果、以下の六つが結論づけられた。

(一) 年齢が高くなるにつれて方言の人称代名詞を使用する人が多くなっている。(表3を参照)

本渡市方言に関するアンケート
(人称代名詞)

氏名

- 1 性別
2 年齢
3 職業
4 最終学歴
5 本渡市 町に何年住んでいますか？
6 住所
7 他の市に住んでいた人は、() 歳
〜() 歳まで()
に住んでいた。

次の90項目について

- ・よく使うもの ○
・知っているがあまり使わないもの △
・知らないもの ×
をつけてください

※相手によって使うか使わないかが違う場合は、あなたの一番親しい人と話す場面を思い浮かべてください。

No.	方 言	○△×	共通語の意味
1	おい		わたし
2	おどみ		わたし
3	おどん		わたし
4	おり		わたし
5	おる		わたし
6	わたい		わたし
7	あたし		わたし
8	こっちゃま		わたし
9	のむ		わたし
10	わし		わたし

No.	方 言	○△×	共通語の意味
11	わい		わたし
12	おいどん		わたし・わたしたち
13	おっだ		わたし・わたしたち
14	おったち		わたし・わたしたち
15	おっどん		わたし・わたしたち
16	おっどみ		わたし・わたしたち
17	おっどむ		わたし・わたしたち
18	おっども		わたし・わたしたち
19	んだ		わたし・わたしたち
20	んどみ		わたし・わたしたち
21	んどむ		わたし・わたしたち
22	んどめ		わたし・わたしたち
23	んどん		わたし・わたしたち
24	んのん		わたし・わたしたち
25	わいどん		わたし・わたしたち
26	おどんどん		わたしたち
27	おりどむ		わたしたち
28	おりどん		わたしたち
29	あんた		あなた
30	うな		きさま・おまえ
31	うんどむ		おまえたち
32	おどりゃ		おまえ (は)
33	おまい		おまえ
34	おどる		こやっ・こいつ
35	おみゃー		おまえ
36	おめー		おまえ
37	こんた		おまえ
38	にし		おまえ
39	ぬし		おまえ
40	ぬしどん		おまえたち
41	わり		おまえ
42	やど		きみ・おまえ
43	あんたがた		あなたたち
44	あんたたち		あなたたち
45	こんたたち		おまえたち
46	あなれ		あのひと
47	あのし		あのおかた
48	あやっ		あいつ
49	あり		あのひと
50	あんし		あのひと・あのかた

No.	方 言	○△×	共通語の意味
51	あい		かのひと
52	あんじょ		あのもの
53	あんふと		あのひと
54	あんまり		あのひと
55	あんもん		あのひと
56	あんわり		あのひと
57	あんわれ		あのひと
58	あいどん		かれら
59	あっどん		かれら
60	かれし		あの男のひと
61	かのじょ		あの女のひと
62	こんし		このひと
63	そんし		そのひと
64	こんふと		このひと
65	そんふと		そのひと
66	そっどん		それたち
67	こすと		このひと
68	こっどみ		これたち
69	こっどん		これたち
70	こなれ		このひと
71	このし		このひと
72	このふと		このひと
73	こんまれ		このひと
74	こんまり		このひと
75	こんもん		このもの
76	こんわり		このひと
77	こんわれ		このひと
78	そやっ		そいつ
79	そんまり		そのひと
80	そんまれ		そのひと
81	そんわり		そのひと
82	そんわる		そのひと
83	そんわれ		そのひと
84	そいどん		それたち・そのひとたち
85	どんふたち		どのひとたち
86	どなた		どのひと
87	どんわり		どのひと
88	どやっ		どいつ
89	だり		だれ
90	どんし		どのひと

表 3

高 年	中 年	青 年	高 校	中 学	年層 項	人 称
32.1	3.5	3.5	0	3.5	イ	一 人 称
3.5	0	0	0	0	ロ	
32.1	64.3	71.4	53.6	28.6	ハ	
7.1	3.5	0	3.5	0	ニ	
25.0	25.0	25.0	42.9	67.9	ホ	二 人 称
23.6	11.8	11.8	11.8	11.8	イ	
0	5.9	0	0	0	ロ	
64.8	58.9	58.9	41.2	29.4	ハ	
0	5.9	0	0	0	ニ	三 人 称
11.8	17.6	29.4	47.1	58.9	ホ	
63.8	5.1	7.7	5.1	5.1	イ	
2.6	5.1	2.6	5.1	0	ロ	
25.6	59.0	59.0	41.0	20.5	ハ	不 定 称
0	0	2.6	2.6	0	ニ	
18.0	30.8	28.2	46.2	74.4	ホ	
50.0	16.7	16.7	0	0	イ	
0	0	0	0	0	ロ	不 定 称
33.3	50.0	66.7	83.3	33.3	ハ	
0	0	0	0	0	ニ	
16.7	33.8	16.7	16.7	66.7	ホ	

- ・イ項＝ $\frac{\text{㉑の割合が他の2つより高い項目数}}{\text{その人称の項目数}}$
- ・ロ項＝ $\frac{\text{㉑と㉒の割合が同率のものの項目数}}{\text{その人称の項目数}}$
- ・ハ行＝ $\frac{\text{㉒の割合が他の2つより高い項目数}}{\text{その人称の項目数}}$
- ・ニ項＝ $\frac{\text{㉑と㉓の割合が道立のものの項目数}}{\text{その人称の項目数}}$
- ・ホ項＝ $\frac{\text{㉓の割合が他の2つより高い項目数}}{\text{その人称の項目数}}$

(一) 女性より男性の方が方言の代名詞を使用する。

(二) 全年代層のすべての人称において忘れられつつある方言が存在している。この例としては、一人称の「こっちやま」「のむ」「んのん」「おどんどん」、二人称の「やど」などがある。

(三) 一次産業に携わる人達の中に方言が多く残っている。
(四) 全年代層を通じて二人称の「めんた」「あんたたち」はよく使用する方言の上位二項である。

(五) 全体的に見て二人称は年代差が小さく、方言使用率は他の人称に比べて最も高い。この理由としては、親しい間柄で会話を行う場合には一人称は省略されやすいし、又、三人称については人称代名詞を使用するよりも姓名で呼んだり、又、普通名詞を用いるからではないか、との推論を立てた。

次にアンケート調査決かをより信憑性のあるものにするために自然傍受法による調査を行った。すべて日常の中で話している場面を収録したので現在本渡市で実際生活の中で使用されている方言そのものである。

・ A (四十代主婦・高校卒・生年より本渡市に在住)

・ B (五十代男性・漁業・小学校卒・生年より本渡市在住)

・ C (七十代女性・生家婚家ともに元庄屋・女学校卒・生年より本渡市に在住)

・ D (八十代女性・夫は元銀行員・小学校卒・生年より本渡市在住)

・ E (七十代男性・元高校教諭・大学卒・大学四年間東京遊学・現在宇土郡在住)

AとBは親戚・AとCは姪と伯母・DとEは甥と伯母の間柄であり、ごく親しい人間関係における自然会話であったが、まず一人称について述べるとすると、Aは「ワタシ」をほとんどの場合使用しているが、B・C・D・Eについては男女を問わずに「オリ」又は「ワシ」の使用が目についた。二人称については全員「アンタ」「アンタたち」が主であり、それは主に同輩以下への使用が多かった。

又、すべての人称を通じてアンケート調査において知っている人が少なかった方言については使用がほとんど見られない。この自然傍受法の調査・研究においてもアンケートの回答結果から結論付けられた前術の(一)～(六)が顕著なものとなった。

次にもう一方の助詞について見てゆきたい。助詞についてはアンケート調査がかなり困難であったので自然傍受法・質問法で調査を行った。助詞の分類については、(一)格助詞・(二)副助詞・(三)接統助詞・(四)終助詞に絞り、研究するに当たっては「講座方言学(9)九州地方の方言」(国書刊行会)・「熊本県南部方言考」(斎藤俊三著)を参照した。

(一) 格助詞

最もよく使用されていたのが「ノ」と「ガ」である。この二つの助詞の使い分けとしては文中の述語句に体言句を含まない場合には「ノ」を、含まれる場合には「ガ」を用

いている。共通語の「くの」に相当するものとしては「ン」があり、これは体言にのみ接続する。例としては、

・テンキン ワルカデスナ

などが挙げられる。又、共通語の「を」に相当する

「バ」、共通語の「へ」（方向を表す）に相当する「サネ」、同様に方向を表すが前述の「サネ」に比較して比較的若い世代まで使用されている「サン」があった。他に

・アスケニヤ クワジモジャカッタカイ。

のように共通語「には」に相当する助詞も広く使用されていた。

(二) 副助詞

まず一番広く各世代に渡って用いられていたのが「バックリ」であり、この助詞は体言用語ともに接続している。

共通語の「でも」「ても」に相当する「デン」・「テン」は、

・イツデンヨカッカカナ。(何時でもよいか。)

・ITTENヨカッカカナ。(行ってもよいか。)

のように使用されていた。又、共通語の「ぐらい」に相当する「グレ」・「グリヤー」や、共通語「だけ」に相当し、量を表す「シコ」(例・ドガシコ・ユガシコ・アガシコ)、共通語の「なりとも」に当たる「ナット」が特徴的なものとして見られた。

(三) 接続助詞

(順接の接続助詞)

まず前件・後件を順当に結びつける表現をつくり、共通

語では「ので」・「から」に相当する「デ」が各年代層に渡って頻繁に見られた。又、本渡においては「ンバ」・「ンバン」(例・センバン・ユワンバン)の形で用いられる「バ」がある。

(逆接の接続助詞)

共通語において「けれど」・「のだが」に当たる「バツテ」「バツテン」はたいへんよく使用されていた。

・ヨカッタツバツテン(よかったのだが)

・イワットバツテカ(言うのだが)

この「バツテン」は、接続助詞「が」と結んだ形の「バツテガ」やそれらを更に重合させた「バツテンガ」・「バツテンカ」等の形でもあらわれていた。

(四) 終助詞

(疑問)

まず「カ」が挙げられるがこれは下に「イ・タ・ナ・ヨ・ノ・ン」などが付いて使用される事が多い。又、体言や体言助詞に付く「ナ」(例・ナンバシヨットナ)や、体言や活用語の連体形に付いてごく親しい間柄で使用される「ヤ」が主なものであるようだ。

(断定・確定)

共通語の「よ」・「ね」に相当する「バイ」・「バナ」が比較的高い年代層で見られた。又、少し投げやりな言い方で「よ」・「だ」に当たる「タイ」・「タ」は若い世代にまで使用されていた。その他「ワイ」「ワナ」・共通語では「くですよ」に相当する「サナ」や怒気を含み、

・ アンオトコワ ツマラントザン。

のように用いられるものもあった。

以上のように助詞の使用実態について自然傍受法から得た資料をもとにして検討したわけであるが、これを人称代名詞と比較した場合男女差・年代差による違いもごくわずかであるとの結論を得た。つまり端的に述べるならば前にも述べたとうり、助詞は保守性が強く容易に変化しない、ということである。助詞は活用語に付属して文章表現に用いられる時においてのみ意味があり、単に付属語として見るならば音節に過ぎない。従ってかなり不変的であり方言研究において重要な意味を持つていると思われる。

本渡方言の人称代名詞と助詞から見た実態には人的要因と社会的要因が密接に関わっているものと思われる。

(一) 人的要因について

第一に年齢差である。年代が高くなるにつれて方言使用率も高くなっており、それは人称代名詞において特に顕著な傾向が見られた。

第二に男女差であって、これを端的に述べるならば明らかに女性よりも男性の方がかなり方言を使用する率が高いという調査結果が出た。そしてこの理由として考えられるのは(一)男女の本質的な羞恥心の違い、(二)社会の中における位置、(三)性役割の違い、等であろうと思われる。

(二) 社会的要因について

社会的要因としてまず第一に考えられるのは、職業・身

分の相違であろう。農業・漁業などの一次産業に従事している人々(注・この場合は特に専業を指す)の中には生坂の方言が比較的使用されており、接客業や公務員などでは逆に方言使用を意識的に控えようとする傾向や、自分は方言を使用していないと思っている場合が多く見られた。また両親の職業や学歴がその子どもの言語生活にまで関わっていることも多いということが言える。

第二に地域差である。本渡市の中においても人口密度が高く官公庁や学校の集中している本渡町とその他の八つの町ではかなりの違いが現在においても顕著に見られたし、又海に面しており漁業従事者の多い佐伊津町と山に囲まれた宮地岳町とでも異なっている。

このように言語というものは、さまざまな要因が螺旋状にからみ合いながら成り立っているわけである。今回の本渡市方言の研究においては、人称代名詞と助詞の二つの品詞に絞って体系的な探りを入れたと考えたわけであるが、カネ不足から多くの不備な点が残ってしまったことは誠に残念である。

方言は生きた人間によって使用される血の通った言葉であるから、方言研究はあくまでも泥くさい、体当りの学問であり続けるべきではないだろうか。

注

注1 一人の人間の言語が形成される時期ここでは十二歳までを指す。